

鈴木 博之 (2018) 『言語記述論集』 10:1-11

## カムチベット語 rGyalthang 下位方言群における歯-歯茎音の 前部硬口蓋化現象とその周辺\*

鈴木 博之

オスロ大学

キーワード：カムチベット語、Sems-kyi-nyila 方言群、音変化、口蓋化

### 1 はじめに

中国雲南省北西部に位置する迪慶 [bDe-chen]<sup>1</sup> 藏族自治州で話されるカムチベット語には大きく3つの方言群があり、それぞれ香格里拉 [Sems-kyi-nyila] 方言群、得榮徳欽 [sDe-rong 'Jol] 方言群、郷城 [Cha-phreng] 方言群と呼ぶ<sup>2</sup>。その中で Sems-kyi-nyila 方言群はさらに5つの下位分類が設けられ、それぞれ建塘 [rGyal-thang] 下位方言群、雲嶺山脈東部下位方言群、維西塔城 [mTha'-chu] 下位方言群、翁上 [dNgo] 下位方言群、浪都 [La-mdo] 下位方言群となる（鈴木 2018）。本稿で議論の対象となるのは、この中の rGyalthang 下位方言群に属する一部の方言である。

rGyalthang 下位方言群は主に香格里拉市の中央部で話されるもので、吹亞頂 [Chos-ba-steng]、期學谷 [Khyim-phyug-sgang)、吉念批 [Gyen-nye-'phel]、安南 [A-la-ngu]、建塘、吉迪 [rGyal-bde]、尼汝 [Myig-gzur]、初古 [mTsho-mgo] といった方言が含まれる<sup>3</sup>。また、雲南のカムチベット語の中で、先行研究が最も多い方言群である（陸紹尊 (1990)、Hongladarom (1996)、《中甸県誌》(1997)、《雲南省誌》(1998)、王曉松 (2008)、鈴木 (2014a) など）。

本稿で議論するのは、藏文 *ts/tsh/dz/s/z* を含む形式に歯-歯茎音および前部硬口蓋音の2種類の音対応が認められる中で、後者の対応関係を示す事例である。チベット系諸言語の中で、藏文 *ts/tsh/dz/s/z* が前部硬口蓋音と対応するというのは、まれな現象の1つに数えられる<sup>4</sup>。先行研究では、この音対応について明確な説明が与えられていないことから、現象が正しくとらえられているのかすら分からない。本稿では、この音対応が一定の規則に基づいて現れていることを明らかにする。そして、この音対応が認められる rGyalthang 下位方言群の分布について地図を作成することで、当該現象をもつ方言の分布を明確にする。

\* 本稿の一部は第32回チベット＝ビルマ言語学研究会（2014年4月5日；京都大学）での口頭発表に基づいている。

<sup>1</sup> チベット語の漢字音写部分には、判明している限り、初出の箇所でチベット文語形式（以下「藏文」）を添える。

<sup>2</sup> 方言分類の詳細とその変遷については、鈴木 (2015:47-63, 261-285) を参照。

<sup>3</sup> 本稿では、方言名はローマ字表記を用いるが、表の中では漢字で表記する。

<sup>4</sup> 中国のチベット系諸言語の一般的な音対応については、江荻 (2002) や張濟川 (2009) を参照。

## 2 蔵文 *ts/tsh/dz/s/z* 対応形式の前部硬口蓋化

蔵文 *ts/tsh/dz/s/z* 対応形式は、基本的に「齒-齒茎音/ $t^h$ ,  $ts$ ,  $dz$ ,  $s^h$ ,  $s$ ,  $z$ 」のいずれかとなる<sup>5</sup>。ところが、特定の語において前部硬口蓋音と対応する事例がある。本節では、この音対応の具体例とその特徴をもつ方言の間に認められる差異を見る。

蔵文 *ts/tsh/dz/s/z* 対応形式が前部硬口蓋音と対応する音節（形態素）は非常に数が少ない。たとえば、次のようである<sup>6</sup>。

表 1：蔵文 *ts/tsh/dz/s/z* が前部硬口蓋音と対応する例

「寿命」	吹亞頂	期學谷	吉念批	安南	霞給	建塘	吉迪	尼汝	初古
<i>tshe</i>	$\text{ʈʂ}^h\text{ə}$	$\text{ʈʂ}^h\text{ə}$	$\text{ʈʂ}^h\text{ə}$	$\text{ʈʂ}^h\text{ə}$	$\text{ʈʂ}^h\text{ə}$	$\text{ʈʂ}^h\text{ə}$	$\text{ʈʂ}^h\text{ə}$	$\text{ʈʂ}^h\text{ə}$	$\text{ʈʂ}^h\text{ə}$
「日にち」	吹亞頂	期學谷	吉念批	安南	霞給	建塘	吉迪	尼汝	初古
<i>tshes</i>	$\text{ʈʂ}^h\text{i:}$	$\text{ʈʂ}^h\text{i:}$	$\text{ʈʂ}^h\text{i:}$	$\text{ʈʂ}^h\text{i:}$	$\text{ʈʂ}^h\text{i:}$	$\text{ʈʂ}^h\text{i:}$	$\text{ʈʂ}^h\text{i:}$	$\text{ʈʂ}^h\text{i:}$	$\text{ʈʂ}^h\text{e:}$
「美しい」	吹亞頂	期學谷	吉念批	安南	霞給	建塘	吉迪	尼汝	初古
<i>mdzes</i>	$\text{ʋ}^h\text{dz}^h\text{i:}$	$\text{ʋ}^h\text{dz}^h\text{i:}$	$\text{ʋ}^h\text{dz}^h\text{i:}$	$\text{ʋ}^h\text{dz}^h\text{i:}$	$\text{ʋ}^h\text{dz}^h\text{i:}$	$\text{ʋ}^h\text{dz}^h\text{i:}$	$\text{ʋ}^h\text{dz}^h\text{i:}$	$\text{ʋ}^h\text{dz}^h\text{i:}$	$\text{ʋ}^h\text{dz}^h\text{i:}$
「明るい」	吹亞頂	期學谷	吉念批	安南	霞給	建塘	吉迪	尼汝	初古
<i>gsal</i>	$\text{ʰ}\text{ɕ}^h\text{i:}$	$\text{ʰ}\text{ɕ}^h\text{i:}$	$\text{ʰ}\text{ɕ}^h\text{i:}$	$\text{ʰ}\text{ɕ}^h\text{i:}$	$\text{ʰ}\text{ɕ}^h\text{i:}$	$\text{ʰ}\text{ɕ}^h\text{i:}$	$\text{ʰ}\text{ɕ}^h\text{i:}$	$\text{ʰ}\text{ɕ}^h\text{i:}$	$\text{ʰ}\text{ɕ}^h\text{i:}$
「豹」	吹亞頂	期學谷	吉念批	安南	霞給	建塘	吉迪	尼汝	初古
<i>gzig</i>	$\text{ʰ}\text{ʂ}^h\text{z}^h\text{i?}$	$\text{ʰ}\text{ʂ}^h\text{z}^h\text{i?}$	—	$\text{ʰ}\text{ʂ}^h\text{z}^h\text{i?}$	$\text{ʰ}\text{ʂ}^h\text{z}^h\text{i:}$	$\text{ʰ}\text{ʂ}^h\text{z}^h\text{i?}$	$\text{ʰ}\text{ʂ}^h\text{z}^h\text{i?}$	$\text{ʰ}\text{ʂ}^h\text{z}^h\text{ej?}$	$\text{ʰ}\text{ʂ}^h\text{z}^h\text{i?}$

表 1 の例を見ると、mTshongu（初古）方言では前部硬口蓋音と対応する例が現れないほか、rGyalbde（吉迪）方言、Myigzur（尼汝）方言では一部の語で現れないことが分かる。ここでまず分かることは、mTshongu 方言が rGyalthang 下位方言群に属する方言の中で、当該例に関して前部硬口蓋化を起こさない類型をもつ方言であるということである。また、rGyalbde 方言と Myigzur 方言は、この音対応に関して mTshongu 方言とその他の方言の中間段階にあるものと考えられる。

さて、前部硬口蓋音が現れる条件として母音の性質に注目すると、/ə/または/i/のときに認められるといえる。調音の観点からみると、/i/に先行する場合に前部硬口蓋音が現れるのは音声学的に説明がつくと考えられる<sup>7</sup>が、/ə/の場合はなぜそうなるのか説明をつけがたい<sup>8</sup>。しかし、蔵文 *ts/tsh/dz/s/z* を含む例については、ほかにもたとえば Choswateng 方言で / $\text{ʈʂ}^h\text{a:}$ /「雹」（蔵文

<sup>5</sup> 本稿で扱う諸方言の音対応の詳細については、鈴木 (2014a) などを参照。

<sup>6</sup> 以下、本稿であげる例は当該の現象を含む「音節」であり、1 音節語を除いて「語」ではない。声調符号をつける例とつけない例がある。

<sup>7</sup> 日本語の/si/が [ɕi] であって [si] でないといった例を考える。類似の現象はチベット系諸言語の中でも甘肅省舟曲 [ʼBrug-chu] 県で話される方言に認められる（鈴木 2013a）。

<sup>8</sup> /ə/については、齒-齒茎音に後続する例も認められ、たとえば、Khyimphyuggong（期學谷）方言の / $\text{ʰ}\text{tsə?}$  [tə?]/「肋骨」（蔵文 *rtsib ma*）、/ $\text{ʰ}\text{səw}^h\text{sə?}$ /「薄い」（蔵文 *srab srab*）や Choswateng（吹亞頂）方言の / $\text{ʰ}\text{sə}$  [tʂ<sup>h</sup>u]/「露」（蔵文 *zil chu*）などがある。

*ser ba*) や /<sup>h</sup>ç<sup>h</sup>a mō/ 「爪」(蔵文 *sen mo*) など、低母音の場合でも前部硬口蓋音が現れる。後続母音の音質とかかわりがあると見られるが、共時的に説明を与えるのは難しい。

蔵文をみると、母音字に *e* を含んでいる事例が複数あることに気づく。この *e* が初頭子音に作用した可能性について考えてみたい。蔵文母音字 *e* を含む他の例を見てみると、たとえば Choswateng 方言について、次のような例がある: /s<sup>h</sup>ə s<sup>h</sup>ɿ:/ 「黄色い」(蔵文 *ser ser*)、/ˈsɿ:, ˈçə:/ 「言う」(蔵文 *zer*)、/s<sup>h</sup>ẽ ɲjə/ 「獅子<sup>9</sup>」(蔵文 *seng ge*)。このうち、蔵文に後接字 *r* がつく例については、rGyalthang 下位方言を中心に特別な音対応を見せることが分かっている(鈴木 2014a, forthcoming) ため、これを除いて考える必要がある。すると、表1の「寿命」、また「雹」「爪」などの例を見ると、すべての音節に蔵文 *e* が含まれていることが分かる。しかし「獅子」の例では、第1音節に蔵文 *e* が含まれているにもかかわらず前部硬口蓋音に対応していない。

「獅子」はサンスクリット *simha* の借用形式であり、また文語語彙層に属し日常用語でないことを考慮すれば、口語形式の分析においてこれを除外する必要性があるだろう<sup>10</sup>。この点を踏まえ、蔵文 *ts/tsh/dz/s/z* 対応形式が前部硬口蓋音と対応するのは、共時的に母音が /i/ である場合か、蔵文 *e* を含む事例でかつ後接字 *r* をもたない例である、という仮説を立ててみたい。これを検証するためには、他の近似の例を検討する必要がある。これについて、続く3節および4節で議論する。

### 3 蔵文 *k/kh/g* と前部硬口蓋～硬口蓋音対応形式

前節で Choswateng 方言における「獅子」の例に言及し、かつ語彙層の点で問題があると述べた。しかし一方、その音形式 /s<sup>h</sup>ẽ ɲjə/ の第2音節に注目すると蔵文第2音節 *ge* と硬口蓋音という対応関係があることが分かる。この例を複数の方言について見てみると、以下のようなになる。

表2: 「獅子」の蔵文第2音節 *ge* の対応例

「獅子」	吹亞頂	期學谷	吉念批	安南	霞給	建塘	吉迪	尼汝	初古
<i>ge</i>	ɲjə	ɲjə	ɲjə	<i>ge</i>	<sup>h</sup> dzə	<sup>h</sup> dzə	<sup>h</sup> dzə	ɲgə	ɲə

以上の例に含まれる前鼻音(mTshongu 方言においては鼻音)は当該語の第1音節末鼻音の影響により生じたものであるから、ここでは考慮せず、ただ調音位置のみに注目すると、Alangu (安南) 方言を除く諸方言で軟口蓋音以外の調音位置が認められる。以上のような音対応を見出すとき、この第2音節に対応する蔵文形式には足字 *r* が存在する形式が期待される。なぜなら、蔵文 *khrag* 「血」の例を見ると、ほぼ「獅子」の第2音節と近似する音対応が認められるからである。

表3: 蔵文 *kh* の対応例

「血」	吹亞頂	期學谷	吉念批	安南	霞給	建塘	吉迪	尼汝	初古
<i>khrag</i>	ˈç <sup>h</sup> ɑʔ	ˈç <sup>h</sup> ɑʔ	ˈç <sup>h</sup> ɑʔ	ˈk <sup>h</sup> ɑʔ	ˈtç <sup>h</sup> ɑʔ	ˈtç <sup>h</sup> ɑʔ	ˈtç <sup>h</sup> ɑʔ	ˈç <sup>h</sup> ɑʔ	ˈtç <sup>h</sup> ɑʔ

<sup>9</sup> 「獅子」については、次節も参照。

<sup>10</sup> ただし Byagkar (霞給) 方言について見てみると、「獅子」は /<sup>h</sup>ç<sup>h</sup>ə ɲdzə/ というように、前部硬口蓋音が現れている。

このような例があるからと言って、*gre* のような蔵文形式を「獅子」の第2音節として考えるのは、チベット言語学上きわめて不自然である。つまり、音対応がうまくいくからといって、足字 *r* を付け加える形式を想定するのは短絡的な見方である。ここで重要なのは、*kr* : /c/ : /k/ といった音対応の関係ではなく、「*kr* が硬口蓋音に対応する」という事実である<sup>11</sup>。蔵文 *kr* という組み合わせにおいて、足字 *r* は軟口蓋音を硬口蓋音で調音するように作用した1つの原因であるが、*r* が直接 [r] のような音価をもって軟口蓋音に変化を起こさせたとは言えない。

鈴木 (2014a, 2017ab) において、rGyalthang 下位方言群の発展史として、*kr* : /c/-/k/ > /tɕ/-/k/ と書けることを明らかにした。それゆえ、「狼」の第2音節が以上に示したような音対応をもつという事実は、その古形式<sup>12</sup> に \*kʲi とか \*kʲu とかいった形式があればよいことになる。それではこの硬口蓋化はどこから現れたのか、というのがよりの確な問題提起であろう。

同様の例は、「文字」(蔵文 *yi ge*) の第2音節、(蔵文 *ske pa*) 「首」の第1音節、さらには蔵文に *e* を含まない例として「紅嘴鳥<sup>13</sup>」(*lcung ka*) の第2音節、「狼」(蔵文 *spyang ki / spyang ku*<sup>14</sup>) の第2音節などにも認められる。

表4：蔵文 *k/g* で始まる音節の音対応

「文字」	吹亞頂	期學谷	吉念批	安南	霞給	建塘	吉迪	尼汝	初古
<i>ge</i>	ɣə	ɣə	dʒə	gʲə	<sup>h</sup> dʒə	dʒə	dʒɤ	ɣjə	dʒə
「首」	吹亞頂	期學谷	吉念批	安南	霞給	建塘	吉迪	尼汝	初古
<i>ske</i>	<sup>h</sup> caʔ	<sup>h</sup> cə	tɕu	<sup>h</sup> ke	<sup>h</sup> tɕə	<sup>h</sup> tɕə	tɕə	<sup>h</sup> keʔ	—
「紅嘴鳥」	吹亞頂	期學谷	吉念批	安南	霞給	建塘	吉迪	尼汝	初古
<i>ka</i>	ca	ca	tɕa	kʲa	tɕa	tɕa	tɕa	ca	tɕa
「狼」	吹亞頂	期學谷	吉念批	安南	霞給	建塘	吉迪	尼汝	初古
<i>ki/ku</i>	<sup>h</sup> ə	<sup>h</sup> ə	<sup>h</sup> ə	kʲ <sup>h</sup> ə	tɕ <sup>h</sup> ə	tɕ <sup>h</sup> ə	tɕ <sup>h</sup> ə	k <sup>h</sup> e	tɕ <sup>h</sup> ə

「文字」の第2音節は「獅子」の第2音節と同じ蔵文形式の対応関係であるが、複数の方言で後者と調音位置が異なって現れている。しかし、いずれの方言も単純な軟口蓋音ではなく、硬口蓋もしくは硬口蓋寄りの発音となっている点に注目できる。

「首」の第1音節に認められる音対応は、末子音に声門閉鎖や母音の音質といった若干の例外を含むものの、初頭子音の対応関係は「獅子」の第2音節に近いと言える。

「紅嘴鳥」「狼」の第2音節の調音位置は、各方言とも「文字」の第2音節や表3の「血」の初頭子音とほぼ同じになっていることが分かる。

<sup>11</sup> *kr* が直接硬口蓋音へと変化した、というのではない点が肝要である。

<sup>12</sup> ここでいう古形式とは、歴史言語学の手続きにおける仮想の方言群の祖形 proto-rGyalthang と名づけられるものに相当する。

<sup>13</sup> 学名 *Pyrhacorax, pyrrhacorax himalayanus*。黒い身体に赤いくちばしが特徴の鳥である。少なくとも香格里拉市のカムチベット語話者は、漢語で「紅嘴吉祥鳥」と呼び、通常のカラスと区別する。

<sup>14</sup> 第2音節が有気音である場合もある。rGyalthang 下位方言群の諸方言では、表4に見えるように、有気音である。



これまでに見た例の中で、「獅子」「文字」「首」の例はみな蔵文 *e* をもっている点で共通である。「紅嘴鳥」「狼」は母音が異なる。以上のような初頭子音の硬口蓋化を引き起こす共通の原因を蔵文に認めることはできない<sup>15</sup> が、3つの例に認められる蔵文 *e* と初頭子音の関わりという点は注目すべきである。

「紅嘴鳥」「狼」の例について考えると、表3で見た「血」の例を参考にすれば、rGyalthang 下位方言群の古形式に硬口蓋化を含む *\*kʲ* といい初頭子音を想定すれば説明がつけられる。

「獅子」「文字」「首」について見れば、蔵文において *ke* が *\*kʲe* のような形式をもっていればよいといえるが、この *\*j* の部分が蔵文 *e* の反映形（の一部）であるということが言えれば、2節で取り上げた問題にも応用できる可能性がある。硬口蓋化（前部硬口蓋化）を引き起こしうる共時的要素の1つが前舌高母音 */i/*（表1の「寿命」を除く例を参照）であれば、それに準じる要素—古形式の *\*i*—が硬口蓋化を引き起こしているのではないか。表1の例を見ると、「寿命」の例は蔵文の母音が *e* であるが、各種口語形式では */ə, jə/* で現れている。Choswateng 方言の音体系を記述している鈴木 (2014a) では、蔵文 *e* は開音節の場合 */ə, jə/* と対応するとしている。しかし、これを一律「蔵文 *e* に */jə/* が対応する」と言い表すことはできないだろうか。

#### 4 蔵文 *e* が *\*jə* に対応するとき

以上に検討した例に基づいて、rGyalthang 下位方言群の多くの方言において、蔵文 *e* が *\*jə* すなわち */jə/* と発音されていたのではないかと仮定した。このとき、実際に同下位方言群において蔵文 *o* が *\*o* よりむしろ *\*wə* と対応すると考えると説明のつく部分が認められるため、蔵文 *e/o* の異なりは *\*jə/\*wə* のように、中核の母音の音質ではなく、それに先行するわたり音部分の異なりとして理解できることになる。

蔵文 *o* の音対応は以下ようになる。「歯」や「彼」は基本語彙に数えられるが、方言間で音対応が安定していない<sup>16</sup>。

表5：蔵文 *o*（開音節）の音対応

「歯」	吹亞頂	期學谷	吉念批	安南	霞給	建塘	吉迪	尼汝	初古
<i>so</i>	<sup>h</sup> swə	<sup>h</sup> tswə	<sup>h</sup> u	<sup>h</sup> wə	<sup>h</sup> wə	<sup>h</sup> wə	<sup>h</sup> ɣ	<sup>h</sup> o	<sup>h</sup> wə
「彼」	吹亞頂	期學谷	吉念批	安南	霞給	建塘	吉迪	尼汝	初古
<i>kho</i>	<sup>h</sup> wə	<sup>h</sup> o	<sup>h</sup> u	<sup>h</sup> o	<sup>h</sup> wə	<sup>h</sup> o	<sup>h</sup> wɣ	<sup>h</sup> wə	<sup>h</sup> wə

また、前節までに検討してこなかった初頭子音をもつ蔵文 *e* の対応形式について補足するた

<sup>15</sup> 「紅嘴鳥」の形式については、チベット系諸言語に関する限り、指小辞（蔵文 *'u*）が付加された形式を考えることができる。たとえば、蔵文では *bya*「鶏/鳥」から *bye'u*「小鳥」という語が形成される。このことから、*lcung ka*「紅嘴鳥」について *lcung ke'u* という形式に対応する口語形式が存在しても不思議ではない。しかし、各口語形式の母音が */a/* であるのは説明できない。また、「狼」に指小辞がつくかは判断がつかない。

<sup>16</sup> Khyimphyuggong（期學谷）方言の「歯」の例に歯茎破擦音が含まれる点や、Myigzur 方言の「彼」の例に口蓋垂音が含まれる点もまた注目に値するが、詳細についてはそれぞれ Suzuki (forthcoming)、鈴木 (2014b) を参照。

めに、蔵文 *sog le* 「のこぎり」の第2音節および蔵文 *leb leb* 「平らな」の第2音節の例を見る。

表6：蔵文 *e* の音対応

「のこぎり」	吹亞頂	期學谷	吉念批	安南	霞給	建塘	吉迪	尼汝	初古
<i>le</i>	ljə	ljə	ljɯ	—	ljɯ	ljə	ljɤ	ljə	—
「平らな」	吹亞頂	期學谷	吉念批	安南	霞給	建塘	吉迪	尼汝	初古
<i>leb</i>	ljɔʔ	ljə	ljɯ	—	—	ljuʔ	—	ljɔʔ	—

ほかに個別例を見ると、Choswateng 方言には /<sup>h</sup>tɕ<sup>h</sup>pjə/ 「物語」(蔵文 *gtam dpe*)、Khyimphyuggong 方言には /<sup>h</sup>djə mwə/ 「平和な」(蔵文 *bde mo*) という例もある<sup>17</sup>。

このように見ると、蔵文との音対応が体系的に見えてくるといえる。もちろん、この点についてはより広い視点からの詳細な考察が必要とされるため、本稿では深くは立ち入らないことにする。ここでは、蔵文 *e* の対応形式が \*jə であると仮定したとき、2、3節で検討した例がどのような音変化の過程を経て成立したのか見ていくことにする。

2節の例を見る限り、蔵文母音 *e* の母音としての音対応は /ə/ であるように見える。これを \*jə と考え直すと、わたり音 \*j が初頭子音に作用して音変化をもたらしたと考えることができる。ここで2節で挙げた例にこの仮説を適用し、\*j が /i/ と同様の音変化を引き起こすと考えた場合、次のような対応関係を得ることになる。

表7：\*jəが歯-歯茎破擦音にもたらした音変化

語義	蔵文	仮説適用後の音形式	*j 作用後の音形式
寿命	<i>tshe</i>	*ts <sup>h</sup> jə	*tɕ <sup>h</sup> ə
日にち	<i>tshes</i>	*ts <sup>h</sup> jəs	*tɕ <sup>h</sup> əs
美しい	<i>mdzes</i>	*mdzjəs	*mdzəs

このとき、\*/əs/ が /i:/ と変化したのか、\*/jəs/ が直接 /i:/ と変換し、母音 /i/ の性質によって前部硬口蓋化したのかは以上の例から説明を与えることができない。ただし、少なくとも「寿命」の例については、以上の仮説を適用することで議論の対象となる諸方言に認められる形式を得ることができる<sup>18</sup>。

次に3節で掲げた例について見ると、\*j の軟口蓋子音への作用が問題となる。「獅子」「文字」「首」の例について考える。上と同様に仮定を適用した対応関係は次のようになる。

<sup>17</sup> 蔵文 *e* に鼻音が先行する例、たとえば蔵文 *med* 「ない」、蔵文 *me* 「火」などにも興味深い音対応を示すものが存在するが、本稿で議論の対象とする諸方言以外にも類似の音対応を示すものがあり、かつ古蔵文との関連も指摘がある(鈴木 2008, 2009) ため、並行して取り扱うのは難しい。

<sup>18</sup> mTshongu 方言を除く。

表 8 : \*jəが軟口蓋音にもたらした音変化

語義	蔵文	仮説適用後の音形式	*j 作用後の音形式
獅子	<i>ge</i>	*gjə	*g <sup>j</sup> ə / *jə
文字	<i>ge</i>	*gjə	*g <sup>j</sup> ə / *jə
首	<i>ske</i>	*skjə	*sk <sup>j</sup> ə / *scə

3節では、蔵文と口語形式の対応関係と音変化史との関係について、蔵文 *kr* : /c/-/k<sup>j</sup>/ > /tɕ/-/k/ と書けると述べた。これに含まれる/k<sup>j</sup>/というのは Alangu 方言に実際に認められる形式であるが、この調音位置と上表の\*j 作用後の音形式が一致する点に注目できる。rGyalthang 下位方言群に属する諸方言のなかで/c/-/k<sup>j</sup>/に対応する音は蔵文の *k*, *kh*, *g* に足字 *r* を伴った例と対応することはすでに明らかになっている（鈴木 2017ab）が、蔵文 *e* を\*jəと仮定して表8の音変化を適用した場合、その音対応が蔵文 *kr* の音対応と共通するということに注意したい。

蔵文には *k*, *kh*, *g* に足字 *y* を伴う形式も認められる<sup>19</sup>。rGyalthang 下位方言群の諸方言において *k*, *kh*, *g+y* の対応形式は、しかしながら、c/k<sup>j</sup> になる例がほぼなく、蔵文 *ky* : /tɕ/ という音対応として実現する。ところが、\*j が仮定される「獅子」「文字」「首」の例は、蔵文との対応関係として *k*, *kh*, *g+r* と並行するのであるから、蔵文 *e* が\*jəと対応するというのは、蔵文 *k*, *kh*, *g+y* 対応形式が/tɕ/に変化した後で、*k*, *kh*, *g+r* 対応形式が/c/-/k<sup>j</sup>/が/tɕ/-/k/に変化する前という、音変化が生じた相対的な時間が定められる。Sems-kyi-nyila 方言群において足字 *r* が変化したのはナシ語の影響を受ける時期と重なると仮定される（鈴木 2013b）ため、それより後に蔵文 *e* (\*e) が\*jəになったのではないかと考えられる。また、蔵文 *r* と関連する点として、後接字 *r* が存在する *er* といった例では、初頭子音に影響が出ない方言が存在する（2節および鈴木 forthcoming 参照）。このため、蔵文 *er* の対応形式については、*e* が\*jə/と対応する以前の音形として、/j/を含まない\*/e/であった可能性があり、\*/e/ > \*jə/と変化する前に、後接字 *r* が作用し/j/のような音に変化した可能性が高く見積もられる<sup>20</sup>。

## 5 rGyalthang 下位方言群内での分布

以上の議論で明らかにした蔵文 *ts/tsh/dz/s/z* 対応形式の前部硬口蓋化現象について、1つの方言において表1に示した語の中で、(A) すべての例で前部硬口蓋音と対応する、(B) 前部硬口蓋音と対応しない例が一部ある、(C) 前部硬口蓋音とまったく対応しない、と3段階に分けて、rGyalthang 下位方言群内での地理的分布を示すと次のようになる。

<sup>19</sup> 足字 *y* は音声表記において\*j と考えてよい。

<sup>20</sup> 鈴木 (2014a) は/l, ɭ/が咽頭化の特徴 [l<sup>ɰ</sup>, ɭ<sup>ɰ</sup>] をもつと述べている。これはいわゆる「r 音」に由来する音と考えられる（鈴木 2013b）ため、/l, ɭ/を蔵文末子音 *r* と関連づけることができる。鈴木 (forthcoming) を参照。



図1 蔵文 *ts/tsh/dz/s/z* 対応形式の前部硬口蓋化現象

図1を見ると、Aの特徴が rGyalthang 下位方言群の分布する地域の中心地および南部にわたってもっとも広く認められるものであることがわかる。ただし、図中の最南端と建塘鎮北部及び東部に分布する方言は、B・Cの特徴を示す。この分布は、当該の音変化が同地域の中心地である建塘鎮を中心に、主要交通路沿いに平原部を伝播した現象であるということを示唆するものである。唯一Cの特徴を示す mTshongu 方言は rGyalthang 下位方言群とは異なる下位方言群との接触地域で話され(鈴木 2018)、この条件が音対応の差異を考える際の要点であろう。このような分岐から、前部硬口蓋化現象は比較的新しく発生した音変化であると考えられる。

## 6 まとめ

本稿では、初頭子音の音対応の基本形式として歯-歯茎阻害音であるものが前部硬口蓋音で現れる例を挙げつつ、これが生じる環境を探った。その結果、共時的に/i/に先行する場合、もしくは蔵文 *e* に先行する場合があてはまることが分かった。特に蔵文 *e* を rGyalthang 下位方言群の古形式において \*jə と置き換えて理解することによって、音変化において作用するのは母音 /i/ とわたり音 /j/ の2種類と考えられることを提示した。蔵文 *o* を \*wə と置き換えて理解することで説明のつく現象もあり、蔵文 *e/o* が並行する音対応をもつと理解した。



また、本稿の記述で明らかになったことの1つに、rGyalthang 下位方言群内部で一定程度の異なりが認められるということが挙げられる。rGyalthang 下位方言群は比較的音対応の安定した方言群から成り立っているとはいえ、細部に無視しがたい異なりがある。また、蔵文 *ts/tsh/dz/s/z* 対応形式における前部硬口蓋化が認められる方言とそうでない方言を地図化して分布を見てみると、rGyalthang 下位方言群の分布する地域の中心地および南部を中心に認められる現象であることが明らかとなった。この音変化は同地域の中心地である建塘鎮を中心に、平原部を中心に伝播した現象であるということを示した。

#### 参考文献<sup>21</sup>

- 鈴木博之 (2008) 「迪慶州瀾滄江流域カムチベット語（徳欽/雲嶺/燕門/巴迪方言）の方言特徴」『ニダバ』第37号 115-124
- (2009) 「迪慶州金沙江流域カムチベット語（奔子欄/尼西/拖頂/霞若/其宗方言）の方言特徴」『ニダバ』第38号 29-38
- (2013a) 「蔵文対応形式から見た舟曲県チベット語拱壩 [dGonpa] 方言の特徴—舟曲県チベット語の概説を添えて—」『京都大学言語学研究』第32号 1-35,  
電子版：<http://hdl.handle.net/2433/182202>
- (2013b) 〈雲南維藏語的 r 介音語音演變—兼談“兒化”與“緊喉”之交叉關係—〉《東方語言學》第13輯 20-35
- (2014a) 「カムチベット語香格里拉県小中甸郷吹亞頂 [Choswateng] 方言の音声分析と語彙：rGyalthang 下位方言群における方言差異に関する考察を添えて」『国立民族学博物館研究報告』39巻1号 45-122, 電子版：<http://hdl.handle.net/10502/5401>
- (2014b) 〈尼汝藏語的小舌輔音與其藏文對應規律〉《東方語言學》第14輯 1-12
- (2015) 《東方藏區諸語言研究》四川民族出版社
- (2017a) 「音韻現象の ABA 分布をめぐる解釈の方法とその実際—チベット文化圏南東端のカムチベット語を例に」『言語記述論集』9, 43-64, 電子版：<http://id.nii.ac.jp/1422/00000911/>
- (2017b) 〈迪慶藏語土話的多樣性及其記錄的意義〉迪慶藏族自治州文學藝術界聯合會編《世界的香格里拉》45-57 雲南人民出版社,  
電子版：<https://mp.weixin.qq.com/s/fF0-UGxRzWbwH09ngq8x8g>
- (2018) 「香格里拉市北部のカムチベット語諸方言の方言特徴とその形成」『アジア・アフリカ言語文化研究』第95号（印刷中）
- (forthcoming) 〈香格里拉藏語的 r 韻尾語音演變：r 韻尾、卷舌化元音、輔音性元音〉《東方語言學》第18輯
- Hongladarom, Krisadawan (1996) Rgyalthang Tibetan of Yunnan: a preliminary report. *Linguis-*

<sup>21</sup> 電子版が公開されているものについては、印刷物の有無にかかわらず URL を掲げる。いずれも最終閲覧日は2018年3月14日である。

*tics of the Tibeto-Burman Area* 19.2, 69-92.

Online: <http://sealang.net/sala/archives/pdf8/hongladarom1996rgyalhang.pdf>

Suzuki, Hiroyuki (forthcoming) *100 Linguistic Maps of the Swadesh Wordlist of Tibetic Languages from Yunnan*. Fuchu: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa

江荻 (2002) 《藏語語音史研究》 民族出版社

陸紹尊 (1990) 〈藏語中甸話的語音特點〉《語言研究》第2期 147-159

王曉松 (2008) 〈對中甸藏語方言的粗淺認識——從語音上看中甸方言的特點和規律〉《王曉松藏學文集》 368-378 雲南民族出版社

《雲南省誌》編纂委員會 (1998) 《雲南省誌 卷五十九 少數民族語言文字誌》 雲南民族出版社  
雲南省中甸縣地方誌編纂委員會編 (1997) 《中甸縣誌》 雲南民族出版社

張濟川 (2009) 《藏語詞族研究——古代藏族如何豐富發展他們的詞匯》 社會科學文獻出版社

### [付記]

筆者による各種言語資料収集に関する現地調査については、次の援助を受けている：日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (S) 「チベット文化圏における言語基層の解明」 (研究代表者：長野泰彦、課題番号 16102001、平成 16-20 年度)、日本学術振興会科学研究費補助金 (特別研究員奨励費、平成 19-21 年度) 「川西民族走廊・チベット文化圏における少数民族言語の方言調査と地域言語学的研究」、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (A) 「ギャロン系諸言語の緊急国際共同調査研究」 (研究代表者：長野泰彦、課題番号 21251007、平成 21-23 年度)、日本学術振興会科学研究費補助金若手研究 (B) 「言語多様性の記述を通して見る中国雲南省チベット語の方言形成の研究」 (研究代表者：鈴木博之、課題番号 25770167、平成 25-28 年度)、雲南省民族學會藏族研究委員會《雲南藏語誌》計劃 (2015 年)、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (A) 「チベット・ビルマ語族の繋聯言語の記述とその古態析出に関する国際共同調査研究」 (研究代表者：長野泰彦、課題番号 16H02722、平成 28-29 年度)、日本学術振興会科学研究費補助金若手研究 (A) 「チベット文化圏東部の未記述言語の解明と地理言語学的研究」 (研究代表者：鈴木博之、課題番号 17H04774、平成 29 年度)。

## **Prepalatalisation of denti-alveolar sounds and its relevant phenomena in the rGyalthang subgroup of Khams Tibetan**

Hiroyuki SUZUKI

This article discusses a potential background of the emergence of prepalatal initials, which are expected to be denti-alveolar counterparts as an ordinary sound correspondence, attested in the rGyalthang subgroup of the Sems-kyi-nyila group of Khams Tibetan, spoken principally in Shangri-La Municipality, Yunnan Province, China. It clarifies that the condition of the phenomenon is related to either a case that a given sound precedes /i/ in a synchronic aspect or a case that a given sound precedes a Literary Tibetan (LT) vowel *e*. The article further analyses that LT *e* corresponds to \*jə in a proto-form (proto-rGyalthang), which means that /i/ and /j/ effect the development of the initial from denti-alveolars to prepalatals. This analysis can be supported by a parallel case that LT *o* can correspond to \*wə in the proto-form.

受理日 2018 年 3 月 14 日